

ふたりの工芸作家の手しごと

社会福祉法人東和仁寿会
就労継続支援B型事業所 ワークまほろば
花巻市東和町東晴山7区6番地1 TEL:0198-36-2025



(左) 菊池悟史さん 40歳 平成15年4月から施設利用開始
(右) 川村拓哉さん 41歳 平成14年4月から施設利用開始

木工製品の製作・販売を主要事業とし、事業所の利用者のアイデアや独創性を取り入れた商品の製作を行い、産直やお土産店、イベントなどで多数の販売実績をもつワークまほろば。

今回は、器用に糸鋸を使いこなし、巧みな技法で多くの作品を生み出す利用者2人にスポットを当てました。

～つくるのが好き～

彼らの机の引き出しには分厚いネタ帳が入っています。新商品を生み出すため、日頃から常にアンテナを立て、日常生活上でも思いついたときにメモを取っているとのこと。

職業指導員の触沢さんは、「ネタ帳のおかげで依頼のあったものは迷わずすぐ製作に取り掛かっているようです。ふたりは本当に木工製作が好きで、20年間この仕事一筋に取り組んできました。本人たちは揃ってここがいい、ここで働くのが楽しいと意思表示してくれており、現在ここは彼らの落ち着いた居場所となっています。彼らは毎日4時間作業に集中しているので、体をとても心配しています。」と話しています。

～施設を支える利用者たち～

四戸所長におふたりの日常について伺いました。「まほろばで20年、工芸作家としての意識は高く、プロとしてのプライドも備えかなり成長してきました。今では、彼らがいないと製品は生まれません、彼らがまほろばを支えてくれています。特別視しないで、人として接することを心がけています。」とふたりに感謝の気持ちがいっぱいの様子でした。

ふたりはまだ無限の可能性を秘めており、日々レベルアップしている様子です。職員の愛情をたっぷり受けながら、「好き」な木工製品づくりに情熱を傾け、素晴らしい作品を生み続けてほしいと願わずにはられません。



個々の可能性を伸ばす就労の場

特定非営利活動法人 遠野まごころネット
就労移行支援 就労継続支援B型事業所 まごころ就労支援センター
釜石市甲子町2-12-1 TEL:0193-55-5100



NPO法人遠野まごころネットは、東日本大震災直後の2011年4月に災害復旧ボランティアの受け入れ団体として設立。その2年後、高齢者や障がい者の生業づくりのため、「まごころ就労支援センター」を開所し、今年で12年目を迎えました。

雑貨の制作にはじめ、2014年には「被災地に新たな産業を生もう」と、ブドウ栽培・ワイン醸造にも挑戦し、商品販売のみならず農福連携にも力を入れています。

「欲しい」と思えるものを形に

当初、「被災地・福祉の商品」として販売されていた手作り雑貨。地域のみならず全国の人との繋がりが広がる中で、「ただ作るのではなく、お客様が『欲しい!』と思い、愛着が持てるものを作りたい。相手に届けるまでがものづくりであると考えています。」と山本さんは話します。しっかりとものづくりに向き合っていかなければならないという覚悟で、裂き織・革製品・ワイン造りなどすべて専門家に学んでから製作を始めました。

縫製を得意とすることから、外部との繋がりが生まれ、現在『SHIKAYA』『Portirra』との企業連携により、駆除された鹿の革をネームホルダー等に商品化し販売しています。

鹿による農作物被害が深刻である一方、寒さの厳しい岩手では、鹿革を羽織防寒として活用するなど、鹿がいる環境の中で生活してきた歴史があります。そのような背景をセンターの利用者も職員も理解し、自然に感謝を込めて丁寧にものづくりに取り組み、製品を通して命の大切さを伝える工夫を行っています。



ものづくり×ものがたり=ひとづくり

利用者それぞれがアイデアを出し合い、得意な部分を担当して、ひとつの製品を作り上げています。山本さんは「1年に2～3名は就職によりセンターを卒業します。縫製とは違う職種に進む方も多のですが、卒業後に顔を出してくれる方もいます。様々な変化も楽しみながら、利用者の皆さんに『ここにきて良かった』と思えてもらえたら嬉しいです。」と話しています。

“まごころ就労支援センター”から繰り広げられるものづくり。季節や時代に合わせた商品を、利用者同士の手で作り上げ、ものづくりの過程が人としての成長にもつながってゆく。ここはステップアップの通過点であり、個々の可能性を活かすための就労の場でもあります。

これからも新たな出会いやものがたりを生み、多くの人々のもとへ形となって届いていくことでしょう。

